

「男、突っ走る！」

第51回

第一稿

作・壽倉 雅

1 名古屋芸術専門学校・全景

2 同・4階・廊下

瑞枝と夏美が気だるそうに話している。

夏美「ああ、お腹空いた」

瑞枝「しようがないでしょ。健康診断、私たち女子は昼からで、朝も昼も食べれないんだから」

夏美「男子は、そろそろ健康診断終わる頃でしょ」

瑞枝「良いな。どうせ、すぐにでも昼ご飯食べに行くんじゃないかな」

3 お好み焼き屋

雅也、浩平、裕司、篤志、和也、拓海
がお好み焼きを焼いている。

雅也「そろそろ焼けそうだね」

裕司「なあ、ちよっとくだらないこと思いつ
いちゃったんだけど」

篤志「何？」

裕司「この写真撮って、女性陣に送るか」

浩平「ああ、それ思いついちゃった」

和也「やっちゃいますか」

拓海「ちょうど焼き加減もいい頃だしな」

と、一同スマホを取り出して、お好み

焼きの写真を撮る。

4 名古屋芸術専門学校・4階・廊下

夏美のスマホに、何件もの通知が来る

——不思議そうに見る瑞枝。

瑞枝「そんな一気に通知来る？」

夏美「何だろ？」

と、スマホを見る——LINEのトークに『写真を送信しました』と、それ

ぞれ雅也、浩平、裕司、篤志、和也、

拓海のトークが表示される。

夏美「お前ら、絶対開かねえからな」

瑞枝「ああ、こりや後で大反省会だな」

夏美「みずちゃん、付き合ってください？」

瑞枝「もちろん。（と時計を見て）あ、そろ

そろ健康診断始まるよ」

夏美「検査終わったら、あいつら集めるよ」

5 お好み焼き屋

談笑しながらお好み焼きを食べている

雅也、浩平、裕司、篤志、和也、拓海。

6 名古屋芸術専門学校・4階・廊下

夏美が足と腕を組んで、冷やかな顔を
している――傍らに瑞枝。

雅也、浩平、裕司、篤志、和也、拓海
が、直立して夏美の前に立っている。

夏美「あんたら、何か言うことは？」

瑞枝「言いだしっぺは、誰？」

雅也・浩平・篤志・和也・拓海「おっくーで
す」

裕司「……」

夏美「おい、奥村」

裕司「はい……」

夏美「何か言うことは？」

裕司「（頭を下げて）申し訳ありませんでした」

夏美「（雅也たちに）あんたらも、同罪ですよ」

瑞枝「みんなも、姐さんに写真送ったもんね」
雅也・浩平・篤志・和也・拓海「（頭を下げて）申し訳ございませんでした」

苦笑してお互いの顔を見合う瑞枝と夏美。

7 同・同・403教室（数日後）

N「その数日後。鈴木先生による『ポートフォリオ集中講座』が開催されました」

学生たちが集まっており、それぞれパソコンで作業をしたり、印刷物をカットイングしている――鈴木がマンツーマンで、浩平のポートフォリオをチェックしている。

雅也、複数のポートフォリオに付箋を貼っている――瑞枝が、ポートフォリ

オを持ってくる。

瑞枝「はい、うちーのポートフォリオチエックしといたよ」

雅也「ありがとう」

瑞枝「付箋にも書いたけど、文章が多いね」

雅也「それ、この間から少しずつ直そうとしてるところ」

夏美がパソコンで作業をしてい——雅也、ポートフォリオを渡して、

雅也「はい、なつ姐さん。ポートフォリオここ置いとくね」

夏美「ありがとう」

と、正樹が入ってくると、

正樹「なあ、木内。俺のポートフォリオ、チェックしてくれない？ 401教室に置いてるんだけど」

雅也「分かった。（と鈴本に）ちよっと401行ってきます」

鈴本「はいよ。（と浩平に）ちよっとバランス悪いな。これじゃダメだな」

浩平「はい」

と、席に戻る——隣でパソコン作業を
している拓海、それへ、

拓海「どうだった？」

浩平「ダメだった」

拓海「眞榮田のあのクオリティでも厳しいんだな」

浩平「正解がひとつじゃないから分からないんだよな」

拓海「（浩平のポートフォリオを見て）俺は良いと思うけどなあ」

反対側の席でパソコン作業をしている
雪奈——裕司がポートフォリオを持ってきて、

裕司「はい。やっぱり、ゆきちゃんのポートフォリオは、ちゃんとゆきちゃんらしい個性があって良いね」

雪奈「ありがとう。おっくーは、どう？」

裕司「俺、慌てて作っただろ。それに、ゲーム系だから載せるものといったら、ゲーム

の企画書とか仕様書ぐらいで、それをただ
ファイリングしてもダメだっていうのはわ
かってるんだけど、デザインとは無縁だっ
たから、どうして良いのか分かんなくて」

雪奈「デザインセンスのことをそこまで偉そ
うには言えないけど、おっくーはゲーム系
だから、表紙を見ただけで、『あ、ゲーム
系だ』って思えるような工夫してみたら？
確かにゲームの企画書とかも、内容が面白
いならそれに越したことはないけど、やつ
ぱり最初に見るのは表紙でしょ。中身が良
くても表紙のクオリティがあまり良くなか
ったら、見てもらえないだろうしね」

裕司「なるほど、さすがゆきちちゃん」

雪奈「ゲーム系でもさ、ゲームキャラクター
の専攻がポートフォリオ作るのわかるけ
ど、プランナー専攻も作るの？」

裕司「いや、俺は自分で作ろうと思っただけ」
雪奈「あ、そっか。だから、今日船倉君いな
いんだ」

裕司「そういうこと」

雪奈「まだ時間はあるんだもん、慌てずゆっ
くりね」

裕司「ありがとう」

8 同・同・401教室

パソコンで作業をしている直也——雅
也が、正樹のポートフォリオを見なが
ら話している。

雅也「左右の余白が、あまり無いような気が
するけど」

正樹「ああ、それか。何か引つかかると思っ
たんだけど、それかも」

雅也「（直也に）加藤はどう思う？」

直也「え？（と正樹のポートフォリオを覗
くと）ああ、言われてみれば余白は気にな
るな」

雅也「デザイン的な部分は、俺は何も言えな
いから、何となく初見で気になったことを
言っただけなんだけどね」

直也「うーん。全体的に、色が濃くないかな。もう少し色薄くしたほうが良いかも。何か、目がチカチカするし」

正樹「なるほどな。ちよつと直してみるか」

雅也「じゃ、俺向こう戻るわ」

正樹「ありがとな」

雅也「はいはい（と出ていく）」

9 同・同・403教室

雅也が戻ってくる——たくさん付箋の貼られたポトフオリオを見ながら、パソコンで作業を進めていく。

学生たち、それぞれが鈴本の添削を受けている。

N「三時間に及ぶ集中講座はあつという間に終わってしまい、学校が締まる時間まで学生たちは作業に追われていきました」

10 学校前の道（夜）

雅也と裕司が歩いている。

雅也「そっか、企画書をそのまま入れたんだ」

裕司「俺、ポートフォリオ勘違いしてた。ただ作品を入れるだけってわけじゃないんだね。舐めてたよ……」

雅也「ゲーム系はゲーム系でも、おっくーやあつぼんみたいなプランナーは、ポートフォリオっていう概念があまりないもんね」
裕司「そういうこと」

雅也「まあ俺もね、文章系のポートフォリオっていう前例がなくて参考にするものがないかったんだよね。だから模索しながら、何とか今日まで作ったんだけど、付箋たくさん貼られた」

裕司「付箋があるってことは、まだ改善の余地があつて、もっと良いものにできるってことだから、前向きに考えようよ」

雅也「そうだね」

と、夏美の声がある。

夏美の声「おっくー、うっちー」

振り向く雅也と裕司——夏美と瑞枝が

歩いていくる。

雅也「お疲れ」

夏美「お疲れ。私たち、これから飲みに行こうって話してたんだけど、うちーもおっくーもどう？」

瑞枝「一緒に行こうよ」

雅也「（裕司に）行っちゃいますか」

裕司「行っちゃおうか」

雅也と裕司、お互いに頷く。

11 居酒屋（夜）

雅也、瑞枝、夏美、裕司が、それぞれ料理をつまみながら酒を飲んでいる。

瑞枝「なかなかポトフオリオって、進まないね」

夏美「そりゃ、一生とまでは言わないけど、私たちにとっては就活で絶対的に必要になるアイテムだからね。短時間でちやちやつと完成できたら苦労しないよ」

雅也「俺もおっくーも、前例がない中でポ

トフォリオ作ってるでしょ。参考にしようにも、映像専攻やイラスト専攻と違って、ポートフォリオに入れる作品そのものが原稿とか企画書じゃん。だから、見せ方を意識するなんて付箋にはたくさん書いてあつたけど、その見せ方が分かんないから苦労するんだよ」

裕司「ただファイルに資料を入れるだけで済むんなら、集中講座なんてやらないもんね。これからどうしようかな」

瑞枝「ポートフォリオも大事だけど、就活のほうも何か進めてるの？」

裕司「一応、求人は調べてる」

雅也「そっか……」

夏美「うちーは？」

雅也「俺はデビュー系だからね、とにかく脚本家の募集とかそういうのを見てるんだけど、なかなかなくて。それに、文章系の先輩がそのまま文章を書く仕事に就職した前例も、実はほとんどなくて。一般就職ば

「っかりなの」

夏美「ああ、そういうえげそんな話してたね」

雅也「だから、俺は何としてでも、在学中にデビューしたいなって思ってるの」

夏美「今、バイトしてるフリーペーパーで連載してるけど、あれだって立派なデビューなんじゃないの？」

雅也「まあ、それは確かにそうだけどね。仕事をもらえたわけだから、ある意味ではデビューにはなるけど、あの一つの連載だけじゃやっぱりね……他にも、いろいろやらなきゃとは思ってる」

瑞枝「連載小説だけで食べていけるわけじゃないもんね。それにやっぱりうちーは、脚本メインでやりたいんでしょ」

雅也「うん。俺にとって、在学中に脚本家としての仕事をもらえることが、ゴールだと思ってる。いや、もちろんデビューしてか
らが本当のスタートラインだってことは分か
かってるけどね。残り一年っていうタイミ

リミットの中で、何とかゴールまでたどり着きたいなって」

裕司「デビュー系はデビュー系で大変だな」

夏美「おっくーはどう？ ゲームなら、結構求人来てるんじゃないの？」

裕司「まあ、それなりに毎年学校に求人は来てるから、どこに就職したいかを選ぶところだな」

雅也「選択肢があって羨ましい」

瑞枝「私たち、とうとうそういう話をするところまで来ちゃったんだね。一年の頃は、あの授業が難しいとか、学園祭をどうしようとかなんて話だったのにね」

雅也「それこそ一年前なんて、俺とおっくーは新生歓迎会の準備してた頃だもんね」

裕司「早いな、あれから一年か」

雅也「ここの三年間は、あつという間だね。」

多分、学校生活が楽しいからだと思うけど」
夏美「それは間違いないね」

と、店員が酒のグラスを運んでくる。

店員「お待たせしました。芋の水割り四つです
ね」

瑞枝「ありがとうございます」

雅也「四つ？ 誰が飲むの？」

瑞枝、無言でグラスの一つを雅也の前に置く。

雅也「え？」

瑞枝「芋焼酎の水割り。飲んでみて」

雅也「飲めるかな」

夏美「大丈夫だって。私たちだって飲めたんだから」

雅也「そうかなあ」

と、恐る恐るグラスを口に付ける。

瑞枝「どう？」

雅也「あ、行ける。あ、美味しいわ、これ」

瑞枝「だから言ったでしょ」

裕司「うちー、あまり早く飲みすぎないよ
うにね。後から酔い回っちゃうから」

雅也「はいはい」

×

×

×

〈時間経過〉

飲んでいる雅也、瑞枝、夏美、裕司。

雅也「（酔って）本当大変よ。私なんて、前例がない状態でしょ。先輩たちがロクな人いなかったんだもの、何の参考にもなりやしなんだから。やってられないわよ」

夏美「（瑞枝に）うちーって、酔っ払うとこうなっちゃうんだ」

裕司「オネエうちーだな」

瑞枝「私、イケナイ扉開いちゃったかな」

フラフラしながらも酒を飲んでいる雅也。

N「自分が酔っ払ったらオネエになることは、自分では自覚がなく、この時は全く気にしていなかったのですが、みずちゃんはなっ姐さん、おっくーという影響力と拡散力のある三人のパワーによって、僕が酔っ払うとオネエになるという話は、一週間もしないうちに、同級生中に広まったのでした」

12 名古屋芸術専門学校・全景（数日後）

13 同・1階・ロビー

エレベーターから出てくる雅也、吉野、
鈴島。

鈴島「そう。木内君は、今日が学生スタッフ
最後のシフトなんだ。残念だな」

吉野「寂しくなるわ。本当にいろいろやって
くれたんだもの。校舎見学や高校生への対
応なんて、見事なものだったわ」

雅也「自分が受けてない授業や教室の紹介が
できるようになったのは、やっぱり個人的
な同級生たちのおかげです。そうじゃなか
ったら、デッサンとかイラストの説明なん
てできないですもん」

吉野「後輩スタッフの良い見本になってくれ
たわ」

雅也「いえいえ、そんなことは」

と、明美やその他の学生スタッフが入
ってくる。

明美たち「おはようございます」

雅也たち「おはようございます」

明美「先輩、今日が最後なんですって？ 明

美、寂しいっすよ」

雅也「確かに、デビュー活動に専念するため
に、オープンキャンパスの学生スタッフは
今日で最後だけど、別に会えなくなるわけ
でもないし、一緒にお花見行ってくつて約束し
たでしょ」

明美「そうでした」

雅也「まあ、寂しさが無いと言えは嘘になる
けどね」

明美「先輩……」

苦笑している雅也。

14 同・5階・502教室

藤堂が仕事をしている——後片付けを
している雅也。

藤堂「そう。うちー、今日でスタッフ最後
なんだ。これまでよくやってくれたけど、

寂しくなるわね」

雅也「みんなにそう言われます。でも、寂しいと言えば授業のほうですよ」

藤堂「え？」

雅也「だって三年生になったら、藤堂先生の授業ないんですもん。この間、新学期の時間割表確認して、びっくりしました」

藤堂「そっか」

雅也「三年生でも受けたかったですよ、藤堂先生の授業。僕は先生のおかげで、キャッチコピーにも興味を持って、電車の中釣り広告を作り手として見れるようにもなりましたし、文章表現やアイデアテクニクでもどれだけ鍛えられたことか」

藤堂「復習したいからって、私が授業で使ってるパワポのデータいただけませんかって、言ったことあったでしょ。あれは講師冥利に尽きると思っただわ」

雅也「本当に復習しようと思ったんですもん」
藤堂「だから連載小説だって決まったのよ。」

真面目に目の前のことを取り組んでる証拠」

雅也「三年生になっても、いろいろ助けてもらうことあるかもしれませんが、よろしく
お願いします」

藤堂「（微笑んで）任せない」

15 同・2階・教務室

雅也が戻ってくる——雅也の鞆の上に、
市販のドーナツの詰め合わせが置いて
あることに気が付く。

雅也、訝しそうに袋を見る——ペンで
瑞枝からメッセージが書かれている。

瑞枝の声「うっちー 学生スタッフお疲れ様。
私からの差し入れです。三年生も頑張ろう
ね。瑞枝」

雅也「みずちゃん」

と、袋を開けて、ドーナツを一つ美味
しそうに食べる。

つづく